豊かさを求めて
農村の意欲と都市の理解

（略歴）
北海道小平町に生まれる。中央大学を卒業後、建設省土木研究所に勤務する。その後北海道に戻り㈱グローバルエンジニア会長となり、社団法人日本中小企業技術振興協会常任理事に。北海道支部開設で初代支部長となる。道内中小企業の中で農業に関係する人達を中心に農業部会を設置し、その活動として農業に対する理解を深めるため研鑽する他、農業振興に対し提言など行っている。

㈳日本中小企業技術振興協会
常務理事・北海道支部長
太田英之

日本は経済大国といわれているが、豊かさを実感として感じ得ないのは農村に住む農民も、都会に住む都市住民も同様であると思われる。

今までは西欧的な科学技術で大きな利益とともに弊害をもたらしていたが、地球の許容量や資源の余裕の助けと、人類の英知で発展をとげてきた。しかし、今日の世界における地球規模の問題を考えるときに、経済大国を実現するためとはいえ、地球環境を悪化させながら繁栄と貧困が混住し、失ったもの、払った犠牲が大きかったのではないだろうか。その弊害解決の技術と英知が明確でなく、将来の不透明さが不安を生み豊かさを感じることが出来ないのであると思われる。これはまた、自然に調和する心の豊かさが失われているからでもあろう。

経済大国実現の犠牲の一つとして、経済効率が低いからという理由で、人間生存の基本原則である食糧生産の場である農業を切り捨てられたのでは、将来により多くの弊害と社会不安を招き、繁栄は崩れ去ることを過去の歴史が実証していることを知るべきである。

その農業が現在厳しい状態で問題となっている。人間生存のための栄養問題であり、食糧問題であり、環境問題であるので、全国民的論議をしなければならないのであるが、単に農業問題として論議をするから一部関係者の問題とされ、一般の人々は傍観してしまう。また一部評論家は農産物の内外価

essay

格差と経済効率の判断で、都市消費者と農民生産者の対立を先導しているようにも思えるのである。本来農業論議は、生産者対消費者、農村対都市といった物理的に相対立するものではなく、「食」・「環境」などについて相互信頼を基礎に成り立つべきことであることを自覚して、全国民が豊かなる「食」・「環境」を語る立場で、今こそ真正面から長期展望をもって、全体的論議をする機会を造り、参加してもらいたいと願うものである。

そのためには農村からの声に「苦しい」・「困った」といった声が目立ち、「明日の農業・農村をどうするか」といった意欲を感じられる声が少ないのではないだろうか。こうした意欲ある声が、村全体の雰囲気を変えるに至らないのは何故なのか。これらの人びとが農村から姿を消してからでは本当にどうにもならなくなり、農村は荒廃し、農業は安楽死するであろう。

農村に住む者であれ、都市に住む者であれ、自らの人生をより豊かなものにと願うことに違いはないであろう。真の豊かさの実現のために、都市生活者と農村生活者の相互理解こそ必要なのである。農村が活力を取り戻すにはまず、農村を生活の場として、食糧を生産し、緑を守っている人びとの意欲が必要であり、その意欲に、農外に住む食糧消費の人びとが関心を示し理解することである。

都市に住む人びとと、農村に住む人びとが自然体で一日も早く交流が出来て語り合えることを願うものである。

この両者の相互交流によって、理解と信頼が出来て初めて、自然と調和された「質を大切にした農業」・「確かなる生活」・「確かなる経営」が出来、活性化された豊かなる農村が出来ると同時に、経済大国の豊かさも実感出来ると思われるのである。

このような農村を造るためには、いろいろな問題があり、短期間で出来るものでなく、粘り強く推進して行くことであるが、農地がなくなり、農民がいなくなってからでは出来ないのである。